

## 不安と期待

若林 寛之 *Hiroyuki Wakabayashi*

(財)国際貿易投資研究所 専務理事

アメリカは建国以来はじめて黒人大統領を大差で選出した。投票結果が発表された11月4日の深夜に大勢の若者がホワイトハウス前に繰り出し歓声を上げ、そのうちひとりの黒人がテレビマイクに向かって、「おれ達はラップミュージックやバスケットだけじゃない、この館の主になんかになれるのだ！」と叫ぶ姿はどの報道よりも雄弁にこの歴史的な出来事を伝えるものであった。一方で、シカゴの勝利会場のステージに次期大統領と家族が颯爽と登場すると会場は歓喜に包まれ最高潮に盛り上がったのだが、演台を遠巻きする透明の防弾ガラスに気付くと、それは人種差別の目に見えない壁の存在を暗示するものでもあった。

前途は容易ではないが、黒人と白人の混血として生まれ異文化の中で育まれたアメリカ大統領の誕生によって、世界の政治は一国主義による分断の政治から多様な価値観を認める融和と協調の政治へと変わる希望を抱かせてくれる。

48年前もそうであったが今回のアメリカ大統領選挙は、政治家の生命は“ことば”であり“ことば”には大衆を動かす力があるということを強烈に教えてくれた。年明けの大統領就任演説に期待が膨らむ。

\*\*\* \*\*

9月のアメリカに始まる金融危機は瞬く間に世界に伝播し、実体

---

経済にまで深刻な影響を及ぼしている。本格的な再建着手はやはり来年1月の新大統領就任を待たざるを得ないのだろうが、ビッグスリーの経営危機や消費市場の冷え込みなど深刻さは日増しに募る。

11月14、15日に開催された20カ国緊急首脳会議（G20）は行き過ぎた市場万能主義の欠陥を認め、金融機関への監視強化など一定の規制が必要であること、そして世界的な信用収縮と経済不況の克服には各国政府と国際金融機関が緊密に連携し協調行動を取ることを確認した。また、ペルーで開催されたAPEC首脳会談は11月23日に世界経済について特別声明を発表し、金融危機への緊密な協力をここでも確認するとともに、グローバルな自由貿易体制を維持発展させるためWTOドーハラウンドの年内の大枠合意達成を「誓約」したことは重要な進展だ。

百年に一度と言われる今回の世界経済危機克服には、迅速かつ果敢な行動が求められるが、それは同時に市場と政府の役割、競争と保護の問題、国境を越える企業活動と雇用確保の問題など経済活動の原理原則に関わる課題に同時に応えていくことにもなる。既にEUは米国政府による過剰な産業保護はWTO違反につながる可能性がある」と警鐘を鳴らしている。ドル基軸通貨体制への挑戦も始まっている。

「パックス・アメリカナの時代は終わった。世界は新しい哲学と新しい政治学、経済学を必要としている。」（梅原猛） さて、わが国日本はどうする。